

# 第34回 日本アメリカ文学会 中部支部大会

日時：2017年4月22日（土）（昨年度より、土曜日の開催となっております）

会場：愛知大学名古屋キャンパス（ささしま）講義棟 L805 教室

## 研究発表要旨

司会 香ノ木 隆臣（岡山理科大学）

### 1. ヘミングウェイの描く「非なる西洋」としてのトルコ——暴力・去勢・死

古谷 裕美（中央大学・非）

ヘミングウェイ・テキストにおけるトルコ表象に着目し、「ポストコロニアリズム」や「オリエンタリズム」という観点からテキスト分析を行う。ヘミングウェイは二十代の頃、カンザス・シティ紙特派員としてギリシア・トルコ戦争の取材で現地を訪れている。ヘミングウェイのトルコでの滞在経験は苦々しいものであり、戦争の悲惨な状況に加えて、マラリアに罹患し高熱にうなされたり、シラミの繁殖によって頭髪をすべて丸刈りにしなければならなかったりと散々なものであった。テキストに描きだされたトルコの描写は、苦しい実体験を反映してからか、実におどろどろしいものやグロテスクなものが多く、悲惨な戦争描写や暴力性、異装性、倒錯性、去勢不安、さらに死のイメージに関連して描き出されてる。トルコは「非なる西洋」として「他者性」を刻み込まれた土地として表象されており、ヘミングウェイのトルコ地域に対する「オリエンタリズム」の一端を見いだすことができる。「スミルナ栈橋にて」、「神よ陽気に殿方を憩わせたまえ」、「キリマンジャロの雪」といったトルコに関する記述のあるテキストを横断的に読み解き、トルコがどのように表象され、テキストにどのような効果を与えているのかという点について持論を展開する。

### 2. ヘミングウェイの地図とドライブ小説

柳沢 秀郎（名城大学）

アーネスト・ヘミングウェイは生前よくドライブをした。1920年代の若きパリ時代に味を占めたヨーロッパでのドライブ旅行は晩年にも行われていたし、アメリカ本土での狩猟の際は猟場までのドライブも彼にとっての娯楽の一部であった。また一時期自宅を構えたキーウエストから2番目の妻ポーリンの故郷ピゴット（アーカンソー州）へ向かう時もドライブであった。『日はまた昇る』や『エデンの園』などに散見されるドライブの場面はそうしたヘミングウェイ自身のドライブに対する志向性の表れであろう。

本発表では主に、死後出版短編作品の一つである「異郷」を扱う。この短編は恋仲の男女による北米大陸横断のドライブ旅行の様子をそのまま物語化したもので、道中の地名などが実に細かく記述されている。本発表の目的は、この「異郷」とキューバのヘミングウェイ博物館で発表者が発掘した地図とを関連付けることで、ヘミングウェイの創作過程の一端を明らかにすることである。

## シンポジウム要旨

### ふるさとから遠く離れて—「アメリカ」文学における旅と異郷の物語—

司会・講師	森 有礼 (中京大学)
講師	Christopher J. Armstrong (中京大学)
講師	杉浦 清文 (中京大学)
講師	中垣 恒太郎 (大東文化大学)

アメリカという空間自体が冒険者/植民者による旅によって「発見」され、旅の結果として拓かれてきた/馴致されてきた歴史を振り返れば、多くのアメリカの文学が旅の主題を包摂するのは半ば当然のように思える。故郷への憧憬や愛着と、異郷に対する畏怖や興味や驚異とを行きつ戻りつ、それらの間に文化、社会及び政治的な境界を見出す実践が旅であったとするなら、旅人とはひたすらに目的地に向かう手段や過程を指すだけでなく、旅する「私」が抱えるものについて見つめ直し捉え直す（或いはそうし損ねる）過程として旅を経験していたのかも知れない。

本シンポジウムでは、四人の発題者が、それぞれに時代も地域も異なる（19世紀のカナダと日本から、21世紀の合衆国とハイチに至る）旅の物語を採り上げて、旅人達の記憶と記録を辿りながら、自他を見つめる視線の先に映る故郷と異郷の中にかがえる「アメリカ」の遺産と理想、幻滅と現実とを詳らかにしてゆきつつ、今の時代に「アメリカ」の旅を捉え直す新たな物語の可能性を考えてみたい。

#### **“A great deal of locality”: The Impressions of a Canadian New Woman in Tokio Christopher J. Armstrong (Chukyo University)**

Anglo-Canadian journalist and novelist Sara Jeannette Duncan (1861-1921) published her first work in 1890, a fictionalized record of her travels to the Orient with female companion and fellow journalist Lilly Lewis in the late 1880s. *A Social Departure: How Orthodocia and I Went Round the World by Ourselves* (1890) offers a series of witty, impressionistic views of the pair's travels westward across Canada, and on to Japan, China, India and the Middle East. While predating the christening of the New Woman by some four years, Duncan's book nonetheless attests to the energetic efforts of a Canadian representative of an international generation of women who, through feminism—though not necessarily suffragism—sought to improve their “own lot and that of [their] sex in general” (Gerson and Strong-Boag). The female traveller who was also a New Woman sought to affirm the importance of

profession while also asserting her right to “the freedom to move about at will,” as Eva-Marie Kroller points out in *Canadian Travellers in Europe 1851-1900*. Duncan’s sojourn in Tokyo, Japan, which occupies a good portion of *A Social Departure*, presents an intriguing yet ultimately problematic testing of the ideals of the New Woman. In this paper, I shall examine Duncan’s impressionistic (and largely orientalist) rendering of the Tokyo city-scape, before turning to a more detailed discussion of her exploration of domestic spaces and the lives of Japanese women.

### 旅するフォークナー—アメリカの冷戦期文化外交における「戦後」の南部と日本—

森有礼（中京大学）

本発表の目的は、ノーベル賞受賞後のウィリアム・フォークナーが、冷戦期のアメリカ文化外交に果たした役割を、特に彼の 1955 年の日本訪問と関連付けて考察することにある。西側自由主義陣営のスポークスマンとして諸国を訪問し、人間の尊厳と民主主義の意義を説いたとされる彼の日本訪問時の発言は、後に *Faulkner at Nagano (1956)* として出版され、日本のフォークナー批評に多大な影響を与えた。だが 1930 年代後半以降、十余年にわたって文筆家としては死んだも同然だったフォークナーが、第二次大戦後の合衆国において「偉大な国民作家」の一人として再評価されるに至った背景に、アメリカが大体的な文化外交を仕掛けた政治的事情があったことは、すでに多くの批評家が指摘している。

こうした背景を考慮しつつ、本発表では、この作家が日本で残した発言を再検証することで、フォークナーの日本訪問の意義と理由を、冷戦期(或いは戦後復興期)日本における彼の受容/需要という文脈において検討してみたい。

### 「継母語」で書かれた帰郷ノート

—Edwidge Danticat の *After the Dance* (2002) を読む—

杉浦 清文（中京大学）

ハイチ出身でアメリカ在住の Edwidge Danticat (1969-) は、これまで英語で作品を書き続けてきた作家の一人である。Danticat は英語を「継母語」(stepmother tongue) として捉えるが、彼女にとって、その「継母」という言葉は、*Cinderella* 等から一般的に想起されうるような否定的な意味を含んだものではない。

本発表においては、とりわけ、Danticat が 2002 年に出版した *After the Dance* に焦点を当てたい。2001 年、カーニヴァルで熱狂するハイチに帰郷した Danticat は、その作品において、当時の「母国」の様子をまさに「継母語」(英語) によって書き記している。本発表では、その帰郷ノートを通して、Danticat が静かに語る、「自分」探しの—時には苦渋に満ちた—旅物語に注意深く耳を傾けていく。そして、「母国」ハイチと「継母国」アメリカの狭間で生きながら、ひたすら作品を創作し続ける「移民芸術家」Danticat の複雑な立ち位置を浮き彫りにしていきたい。

## Hobo の文化的遺産——現代アメリカにおけるロード・ナラティブの再創造

中垣 恒太郎（大東文化大学）

Reif Larsen, *The Selected Works of T. S. Spivet* (2009) は、学校で読み聞かせてもらった大恐慌時代のホーボーにまつわる物語をもとに、少年が貨物列車に飛び乗って西部を移動する。一方、Sonia Nazario, *Enrique's Journey* (2006) は、貨物列車にただ乗りしてメキシコを横断し、命がけでアメリカを目指す中南米の少年たち取材したルポルタージュであり、筆者自身も「死の列車」と称される同じ航路を追体験する。

もともとは「渡り労働者」を指す hobo 像が現在なおもアメリカ文化に継承されていることが伝わる格好の 2 作品であるが、同じように貨物列車への無賃乗車を試みる少年の物語であるにもかかわらず正反対の状況を反映している。現代アメリカにおけるロード・ナラティブの潮流を「Hobo の文化的遺産」の観点から検証する。